

コーディーリアの唇

Cordelia's Lips

梅宮 創造

UMEMIYA Sozo

Abstract: Among various features discernible in Noh-opera, nothing seems to me more impressive than the rhythm and tone of *Utai* (songs and chorus),—so I believed when I saw the recent re-production of *Noh-King Lear*. In the original *King Lear*, the word ‘nothing’ is often repeated, starting from the famous line “Nothing, my lord” by Cordelia, and then Lear’s fearful reply, “Nothing will come of nothing.” The play, however, goes far beyond the region of nothingness, and that seems to be the very point which *Noh-King Lear* aims at. Coming to the last climax, Lear sees a faint sign of life in Cordelia’s lips, and cries, “Look on her,—look, her lips,—What is’t thou say’st?” (from *Noh-King Lear*, translated by Kuniyoshi Ueda) Lear confidentially speaks to his daughter, and this is a crucial moment of Lear’s passing into another world to meet his beloved daughter there. On the other hand, Shakespeare’s Lear calls the others around him as if to confirm Cordelia’s life resurrected through their observation, saying, “Look on her, look, her lips, Look there, look there!” Lear, then, falls with no assurance of the truth in Cordelia’s lips. The difference of the two cases above is quite clear. In *Noh-King Lear*, again, Lear finally meets his dead daughter in bliss, and such is a great human joy and happiness expressed fully with the fantastic Noh-dance and song, and unparalleled music.

Keywords: Noh, King Lear, Cordelia, nothing, lips,
能、リア王、コーディーリア、無、唇

能に関してはズブの素人である私の目にも、このたびの『能・リア王』は斬新かつ刺激的で、啓発されるところが多かった。演者の絢爛たる装束と、小鼓の硬い音、その掛け声に手さばき、それにまた、玄妙な色彩が舞うあの不可思議な舞台空間は忘れようにも忘れられない。しかしそれらにも増して、謡がくり出す常ならぬ言葉のリズムと、かくも濃密な言葉のつらなりに私は参ってしまった。能とは何か、という思いが今頻りである。

原作『リア王』のキー・ワードが「無」(nothing)であることは改めて云うまでもない。「何もございません」(Nothing, my lord)と答える末娘のコーディーリア、それに激怒したリアが「無から生れるは無だけだぞ」(Nothing will come of nothing)と返す。しかし『リア王』

は無の一点にとどまらず、無から有を生ぜしめる魔法の劇とも解されよう。能が究極の無を見つめ、さらに無の先方にひらける域へと踏み入るものならば、能の向かう所と『リア王』のドラマとが、どこかの地点で交わるはずである。『能・リア王』の着眼もそこにあつたのではないだろうか。ここで、末尾の山場に目を向けてみよう。

「見よ見よ。コーディーリアの。唇動きて。何か言ひたるぞ。何言ひたるや
コーディーリア。何言ひたるやコーディーリア」

上田邦義氏によるこの件のとらえ方と、

“Look on her: look, her lips, Look there, look there!”

というシェイクスピアの原典とは、確かにある一点で交わっている。愛娘の骸をまえに、リアは為すすべもなく、断腸の悲しみを引きずっているのだが——ふと、娘の唇に異変を感知する。シェイクスピアのリアはその異変に驚き、そばの者に注意を促すかのように、「ほら、ほら」(Look there, look there!)と連呼しながら息絶えるのだ。リアは幻影を見たのかもしれない。幻影は「無」でありながら、当人にとっては「有」であろう。有か無か、はた目にはいずれとも知れず、不分明のうちにリアの劇は終る。一方、上田氏のリアはどうだろう。娘の唇の動きを見て、「何言ひたるやコーディーリア」と呼びかけているが、ここには幻ならぬ娘のまことを信じて疑わないリアがいる。それどころか、リアはすでに娘の住まう域へと一步踏み込んでいるかのようだ。リアの確信は余人の介入を拒んで、ひとり揺るぎない。“Look there”とこの世の側に叫び、「コーディーリア」とあの世の側へ呼びかけるのには、これだけ大きなちがいがあって、その差は最後のまとめ方にいっそう顕著である。すなわちシェイクスピアのエドガーが(オールバニーとの版もあり)、「もつとも老いたる者こそ、もつともよく耐えた」(The oldest hath borne most)とつぶやき、かたや能にあつては、来世のコーディーリアがリアの臨終の幻にそのまま重なって再登場する。

かくて、リアの悲しみと絶望をやさしく包むように後シテ、コーディーリアが舞う。リアも舞う。父と娘がついに寄り添うた喜びの瞬間と解釈してよいのだろう。しまい、地謡方の霊

気をおびた歌がゆっくりと流れる。「^{まこと}真実の国へ行き給へ真実の国へ行き給へ」——私たちをと
うとうここまで連れてくる、能とは何か。